

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 内部質保証推進IR委員会、全学評価委員会

(責任者名) 小池 茂子
 (役職名) 学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>本プログラムは、5つの必須科目から構成されている。令和7年度以前入学生は、「AIと情報リテラシー」「データサイエンス入門A」「データサイエンス入門B」「情報学A」および「情報基礎」を履修する。令和8年度以降入学生については、科目名の変更に伴い、「AI入門」「データサイエンス入門」「データサイエンス応用」「ウェブプログラミング基礎」および「情報基礎」を履修することとしている。これらの科目は令和7年度に新たに開設されたものであり、担当する専任教員の着任に合わせて開講した経緯から、令和7年度における履修者数は比較的少数にとどまった。しかし、令和7年度春学期と同一内容で秋学期に開講された「AIと情報リテラシー」において登録者数が2倍以上となったこと、令和8年度春学期の授業において受講者数が大幅に増加したことから、今後は全体として履修率の向上が見込まれる。</p> <p>本学では、「内部質保証推進IR委員会」と「全学評価委員会」によるプログラムの自己点検・評価を実施する体制を整備している。「教育支援課」との情報共有により、履修登録状況や単位修得状況を正確に把握し、各年度における履修・修得状況の確認と分析を行うことができる。さらに、「基礎総合教育部会」および「AI・データサイエンス教育委員会」を中心に、評価結果に基づく改善策を検討・実施し、進化させる体制を構築しており、プログラムの履修率向上と質的改善を継続的に図ることができる。</p>
学修成果	<p>本プログラム対象の授業では、Microsoft Teamsや授業ポータルサイト「UNIPA」で作成した授業用グループを活用し、各回の授業資料や課題を配布している。また、「チャット」機能を用いて学生と個別にやり取りを行い、課題を回収することで、提出状況や理解度を把握している。提出状況や理解度が芳しくない学生には、個別サポートを実施し、学修の定着を図っている。これにより、学生の理解度と到達目標の達成状況を確認しながら授業を進めている。</p> <p>また、「教育支援課」では「授業評価アンケート」の集計結果や成績評価の状況を分析し、「基礎総合教育部会」および「AI・データサイエンス教育委員会」で構成される「プログラム改善体制」と連携しながら、次年度以降の授業改善を計画・実施できる。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>毎学期、授業評価アンケートを実施しているが、対象は開講科目の一部であり、「データサイエンス入門A」および「情報基礎」は令和7年度の調査対象には含まれていなかった。令和7年度春学期には「情報学A」、秋学期には「AIと情報リテラシー」および「データサイエンス入門B」が調査対象となった。今後は、5つの科目すべてについて、継続的にアンケートを実施する予定である。</p> <p>「情報学A」では、「シラバスに沿って授業が進められていた」「質問や相談に丁寧に対応していた」「教員は学生が授業に集中できるように配慮していた」「テキストやプリント、機材の使い方は効果的だった」「この授業の難易度は自分に合っていた」などで高評価を得た一方、「Webページ作成の際に完成図があると安心できる」といった改善点も示された。「AIと情報リテラシー」では、「教員の説明はわかりやすかったか」「授業はシラバスに沿って行われていたか」「学生の質問・相談への対応」で肯定的評価が多く、「意欲的に取り組んだか」も高評価であり、生成AIを用いた授業への高い関心が確認できた。「データサイエンス入門B」についても、「教員の説明はわかりやすかったか」「シラバスに沿って授業が行われていたか」「教員は学生の質問・相談に適切に対応したか」「テキストやプリント、機材の使い方は効果的だったか」「授業に意欲的に取り組んだか」「オンライン資料は分かりやすかったか」「課題量は適切だったか」で概ね高評価であった。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	<p>大学総務課が実施する「授業評価アンケート」やIR室が実施する「大学生生活に関するアンケート」には、後輩や他の学生への推奨度に関する質問項目は設けられていない。先に述べたとおり、2科目は令和7年度の授業評価には含まれていなかったが、実施した3科目の「授業評価アンケート」には「この授業には意欲的に取り組んだ」と「自由記述欄」などの質問項目があり、学生の知的関心や達成感を把握することができた。</p> <p>なお、令和9年度には、本プログラムの一部の科目を必修科目とする予定であり、履修率の向上と学修意欲の定着が期待される。</p>
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>本プログラムは、専任教員の着任に合わせて令和7年度に初めて開講したため、履修者数や履修率の具体的な数値目標は設定していなかったが、他の情報系科目の平均受講者数である20名程度を想定していた。「情報基礎」を除く4科目は新設科目であり、従来の情報系科目と名称や内容が一部異なっていたため、周知が十分に行き届かず、履修者数は伸び悩んだ。</p> <p>本学は人文社会学系大学であり、データサイエンスやAIに対して苦手意識を持つ学生も一定数存在すると考えられる。そのため、令和8年度はガイダンス期間に新生、在校生を対象にそれぞれ履修説明会を実施し、学修意義や授業内容を丁寧に説明し、理解を促すことで、履修を積極的に促進している。実際、令和7年度春学期と同一内容で秋学期に開講した「AIと情報リテラシー」では登録者数が倍増し、令和8年度春学期開講科目の受講者数も大幅に増加したことから、今後の履修率向上が期待される。なお、令和9年度には本プログラムの一部の科目を必修化する予定である。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>学外からの視点</p> <p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p> <p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本プログラムは令和8年度入学生から開始したため、現時点では修了し卒業した学生はおらず、令和12年3月卒業生が初めての修了者となる予定である。</p> <p>今後は、就職支援部門と連携し、プログラム修了者の進路を継続的に把握するとともに、本学IR室が実施する「卒業生就職先アンケート」を通じて、企業からの評価を収集・分析し、プログラム改善に活用する。</p> <p>上で述べた、本学のIR室が実施する「卒業生就職先アンケート」には「本学の卒業生をご採用いただいた企業の方にお伺いします。本学の卒業生は、以下の能力が身につけていると思われますか。」という設問があり、「数量的スキル」「情報リテラシー」「問題解決力」「これまでに得た知識・技能・態度等を総合的に活用し、課題を解決する」を評価してもらっているため、そのデータをもとに授業の改善ができる。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>本プログラムは、人文社会学系の学生を対象とし、数理・データサイエンス・AIを現代社会における基礎的素養として位置づけている。専門的な技術者を育成するものではなく、社会を多面的に理解し、より良い未来を構想するための「道具」としてこれらを活用できる能力、および主体的に学ぶ姿勢を育成することを目的としている。</p> <p>教育内容として、まず「情報基礎」では、文書作成やプレゼンテーション等の情報活用技能を体系的に扱い、自ら情報を整理し、発信する経験を通じて、学修の有用性を実感させる。「AIと情報リテラシー」では、生成AIの体験を通して人間や知能の本質について考察させ、知的好奇心を喚起する。「データサイエンス入門A」および「データサイエンス入門B」においては、教育やビジネス等の実データを用いた演習を行い、仮説構築、分析、可視化、解釈に至る一連のプロセスを体験させることで、データから新たな価値を見出す楽しさと多面的な視点を養う。さらに、「情報学A」では、ウェブプログラミングを通じた社会への情報発信を経験させるとともに、情報セキュリティ、倫理的留意点、関連法規についても扱い、技術を活用する際の責任ある態度を涵養する。</p> <p>これらの学修を通じて、数理・データサイエンス・AIを専門的で遠い存在としてではなく、自らの考えの根拠を説明し、表現するための身近で有意義な知的道具として捉えさせる。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>本学は人文社会学系であるため、AIやICT、数学の高度な専門内容を重視したカリキュラムの実施は困難である。そのため、本プログラムを構成するすべての科目において、担当教員が作成した授業資料を配布し、授業テキストとして活用している。</p> <p>授業資料では、社会や企業で求められる基本的な知識とスキルの習得を目的とし、授業では身近な事例を多く取り上げ、定性的な説明を通じて数理・データサイエンス・AI分野の本質的な概念をわかりやすく解説している。演習資料では、パソコンやソフトの操作手順をステップごとに画像で示し、繰り返し学習することで自然に技能を習得できるよう工夫している。</p> <p>さらに、「ラーニングセンター」と「情報センター」による支援体制を整備し、パソコン操作に不安を持つ学生へのサポートを充実させている。</p>